

# ぽんすけと龍

田中 雄一

お日様がぎらぎらと照りつける、暑い夏の日のことでした。

ころころと太ったタヌキのぽんすけは、病気がちなおっかさんのために、近くの田んぼで食べ物を探していました。

「タニシにドジョウ、たくさんとれたなあ。早く帰って、おっかさんに食べさせんといかん」

ぽんすけが帰ろうとしたそのとき、真っ黒なかみなり雲がにわかにか空をおおい、ゴーゴーと音を立てて滝のような雨が降ってきました。

「これはかなわん」

と、ぽんすけは近くにあったお堂に逃げ込みました。お堂の中は薄暗く、なんだかひんやりとしています。襖には大きな龍の絵が描かれていて、ぎょろりとした目で、ぽんすけを見ているかのようです。

「なんだか薄気味が悪いなあ」

そう思いながらも、ぽんすけはいつの間にか、うとうとと居眠りを始めました。しばらくすると、なにやら声が聞こえます。

「やい、こら、そこのタヌキ」

目を明けると、大きな龍がぽんすけをのぞきこんでいるではありませんか。

ぽんすけは、

「わっ！」

と声をあげ飛び上がりました。暴れん坊の人食い龍が、神様の罰を受け、お堂に閉じ込められていたのです。優しい心を見つけないと、ここを出られないと言います。

「俺を助けろ。出ないと食い殺すぞ」

がらがらとした低い声でおどす龍。ぽんすけは震えながら言い返しました。

「嫌だ。おら、おっかさんにまんま届けないといかん。かまってる暇なんてないや」

それを聞くと、恐ろしい龍は何とも寂しそうな目をしました。するとぽんすけは、なんだか龍がかわいそうにもなってきたのです。でも、どうすればいいのか、龍にもぽんすけにも分かりません。龍は言いました。

「俺のひげを売ってこい。その金をこの貧しい村にばらまくんだ。みんな喜ばずさ」

ぽんすけは龍の言うとおりに、ひげを売り、家いえ

の軒先に銀貨をおいてきました。

「金だ、金だ！」

村人たちの喜ぶ声が聞こえてきます。それでも、龍はまだお堂から出られません。

「なぜだ」

龍は苦しそうに息を吐き出しました。そして、こう言うのです。

「もうお前は帰れ。おっかあが待っているんだろ。俺のことはもういい」

龍をひとり残すことはできません。首を振ると、龍は恥ずかしそうにこう言いました。

「今日は帰れ。でも、もしまた、この辺りに来ることがあれば寄ってくれないか」

その時です。龍の体が白く輝き始めました。そしてお堂の天井を突き破り、空へと高く上ったのです。長い間、ひとり孤独に生きてきた龍、ぽんすけと出会ったことで、その心はひらかれたのです。龍はぐんぐんと空に上り、ぽんすけを見下ろしました。その目は優しく、うっすらと涙が浮かんでいました。

はっと目を覚ますと、あたりは真っ暗、夏虫の鳴き声が聞こえてきます。

「夢だったのか。早く帰らねえと」

襖からは龍の絵がきれいに消えていました。